

サンプル 冒頭より

その歌声に恋をしたのは、教会の裏の墓地でだった。

日曜日の昼下がり。高く結い上げた銀色のポニーテールを背中で踊らせながら、カイは教会のきらきらしたステンドグラスが目の前に見える木陰を選んで座り込む。

吟遊詩人^{バード}に転職して数週間。楽器の練習場所を探してふらふらした挙げ句、辿り着いた特等席。

土の中に死体が埋まっている、そう考えなければ、緑豊かで景観も良く、静かで良い場所だった。

カイはマンドリンを構えて、弦のひとつひとつを指で弾き、音を自分の耳で確かめて調整する。

やがて、予定通り、いつもの歌声が聞こえてきた。

この曜日のこの時間に、『彼』は歌う。

顔も名前も知らない相手だ。知っているのはいい声でいい詩を歌うということだけ。プリーストのグロリアなのだろうか？ それすらも分からない。

豊かなビブラートを含んだ、男のテノール。低音も高音も綺麗に澄んでいて、よく通っている。声が掠れたり裏返ることもない。曲が盛り上がり佳境に入ると、息が続くのかとハラハラするほどの長音のビブラートを惜しみなく張り上げる。一回、二回、三回……回数を重ねても歌声の勢いは衰えない。いつ息継ぎ^{ブレス}をしているのかも分からない。

歌声が脳内いっぱい響き、今にも何かが、大げさに言

えばオーディン神が光臨しそうな衝撃を覚える。カイはマンドリンで伴奏を弾き始めた。

今までの経験からいくと、こうして勝手にデュエットをすると、相手は興味を持つて寄ってくるか、あるいは嫌がって注意をしに来る。

だが、この歌声の主は、毎週同じ事を続けても一向に姿を見せない。教会の窓から顔を覗かせることもしない。その代わり、伴奏をやめろと言うこともなかった。

その態度が少し不思議で、それでも怒らないならいいか、とカイは伴奏を続けていた。新しい曲が流れてくれば即興でそれらしく弾き、知っている曲が流れてくれば前回とは違う新しいアレンジを付ける。

声の主が誰なのか。

彼が歌っているときに、教会に入ればすぐ分かることだが、カイはそうしたことがない。

歌が素晴らしいからといって、歌手の中身が素晴らしいとは限らない。むしろ、逆のことが多い。何かを得る代わりに、何かを欠く。才能と人格は別、作者と作品も別だ。

夢は夢のままでいたほうが、きつとロマンチックだ。

夢から醒めるときが来るとするならば、きつと彼のほうから会いに来るときだろう。

まるで恋をする少女だな、と我ながら笑う。

ふと、視界の端に白い影が見えて、カイは顔をあげた。

教会から金色の髪を後ろで束ねた男聖職者^{ハプリースト}が出てきて、

墓場の方へ歩いてくるのが見えた。

一瞬、歌声の主かと期待したが、『彼』の歌声が教会か

ら聞こえてきたので別人だと悟る。

演奏がうるさくて、教会の人が注意しに来たんだろうか。

カイはどきりとして立ち上がりると、バードのマントに着いた土を払う。

ハイブリーストは怒っている様子でもなく、カイの目の前まで来ると緑色の小さな何かを差し出した。

四つ葉のクローバーだった。

「この歌声の人から貴方にへと」

カイは思わずぽかんと口を開けた。

おずおずと差し出されたクローバーをつまんで受け取る。

「……あ、ありがとうございます。でも、どうして？」

「彼が、貴方の伴奏が好きだと」

「へ!? あ、ありがとうございます」

カイはクローバーを見た。どこに仕舞おうか、鞆に仕舞ったらグチャグチャになるんじゃないか。

ぐるぐると考えた末に、胸元に挿した。香でも焚きつけているのだろうか、ふわりと何かのハーブの香りがした。

「あと、これは私から」

ハイブリーストはハエの羽を取り出し、掌の上に広げた。これを使うと別の場所にテレポートする、魔法の道具だ。

「ここ、たまに柄の悪い人も来るので。危なそうな人を見たら、すぐ逃げて下さいね」

「ありがとうございます」

ハエの羽を受け取ると、ハイブリーストは会釈した。

「それじゃ、私はこれで」

「あ、ありがとうございます!」

お礼ばかり言ってるな、と思いながら、嬉しいような気

恥ずかしいような気持ちで、羽をポケットに仕舞った。

でも、本当はあのとき、カイはこう聞きたかった。

『どうして自分で渡しに来なかったんですか?』

街で演奏をしていて、話しかけられることはよくある。

子供から花を貰ったり、老人からキャンディを貰ったり、通行人にうるさいと罵声を貰うこともある。

気持ち伝えるなら、人に頼まずとも自ら来てもいいだろうに。忙しか、内気なのか、他に理由があるのか。

ふと気づくと、歌声は聞こえなくなっていた。

陽は傾いて、風が肌寒い。さっきは木漏れ日が綺麗に当たっていた特等席も、すっかり日陰になってしまっていた。

カイは、今日の練習を終えることにした。

それからは、雨の日が多く、外出しない日が続いた。

日曜日の朝、カイは宿屋の窓から外を見て、ブラウンの目を輝かせた。晴天の青空だった。

嬉しくなると、思わず予定よりも早く出かけたのがいけ

なかったのか。

カイは、墓地でローグに絡まれていた。

その日は少し様子が違った。教会の礼拝客が連れてきたらしき子供がいて、カイが楽器を鳴らし始めると周りに集まってきた。

「ねーねー、何か歌って!」

「俺も俺も! なんか勇ましいやつ!」

「私は綺麗な歌がいい!」

カイは微笑んで言った。

「それじゃ、勇ましい曲を」

歌よりは楽器の演奏のほうが好きだが、子供達にリクエ
ストされれば唄うに決まってる。

カイはブラギの詩を弾き始めた。テンポの速い短調の旋
律。連続して跳ねるように流れるクレッシェンド。最初か
ら最後までが佳境、そんな賑やかな曲に合わせて、高い声
で歌を乗せる。気付くと汗だくになっていた。

きらきらした目で子供達が見る。子供は嫌いじゃない。
そのときだった。

「おい」

ふと呼びかけられて、カイは顔を向ける。不機嫌そうな
赤毛のローグが、いつの間にか隣に立っていた。

よく見ると、体中が傷だらけの男だった。どこかでケン
カでもしてきたのだろうか。カイは不穏な気配を感じ、思
わず子供達を抱き寄せる。

『柄の悪い人も来ますから』……ハエの羽をくれたハイブ
リストが、前にそう言っていたか。あのハエの羽はポ
ケットに入っている。しかし、子供を置いて飛ぶわけにも
いかない。緊張した面持ちでカイは尋ねた。

「何ですか？」

「『イドウンの林檎』ねえ？」

「……ごめんなさい、まだ覚えてません」

カイは正直に答えた。バードに転職してからは、とりあ
えずメイン曲のひとつであるブラギの詩を習得して、あと
はふらふらと趣味で演奏して回っているだけだった。

イドウンの林檎は体力が回復する曲だ。^{スキル}カイは鞆からお

やつのリングを取り出すと、そっと差し出した。

「これくらいしかないですけど……、良かったらどうぞ」
ローグは片眉をあげると、ひょいっとリングを手を取っ
た。受け取ってくれたことにカイが安堵すると、ローグは
いきなり地面に叩きつけた。

「アホか、これで体力いくつ回復すると思ってるんだ」

落ちたリングを靴の裏で踏み、土の中にめり込ませる。
子供達がそれを見て泣き出した。カイは子供達の頭を撫で
ながら、慌ててなだめる。

「ボクは大丈夫だから。ほら、泣かないで」

子供達は火が付いたように泣いている。ローグは火が付
いたように笑っている。カイはむっとして言った。

「何ですか!? こんなことして楽しいんですか……っあつ、
ちよつと！」

ローグはカイからマンドリンを取り上げると、興味深そ
うな顔でジロジロと眺めた。

「なーんだ、大事そうに抱えてるから何かと思ったら、店
売りのかよ。しょぼいな」

「返して下さい！」

転職したときにバードギルドからお祝いに貰った楽器だ。
確かに、楽器自体は店で売っているのと同じ物だが、そこ
に込められた気持ちは全然違う。

「大事な楽器なんです！」

ローグは新しいおもちゃを手に入れた子供のような表情
をすると、墓石のひとつに叩きつける。

カイはあわてて楽器と墓石との間に身体を滑り込ませた。
バキッ、と派手な音がして、カイはしたたかに背中を打

ち付ける。激痛に呼吸が止まった。

マンドリンは無事だった。

「えっ？ 何、面白れえことやってんの。そんなにコレが大事なのか？」

ローグは一瞬だけ手を止めたが、楽器を構え直すと、痛がるカイの身体に焦点を合わせる。

「よし、ミュージカルストライカー！」

「……ッ！」

ガンガンッ、と連続で打撃が来た。カイは打たれる度に息を止めて痛みで呻いた。

ミュージカルストライクは楽器で矢を撃つバードのスキルで、楽器で相手を殴っているように見える。その真似をして遊んでいるのだ。

「この……」

寝転がった姿勢のまま、ローグが振り回すマンドリンを両手で掴むと、カイは引っ張って取り返そうとする。

嗜虐心に満ちた目と目が合った。心底楽しんでる顔だ。

カイは睨み返してマンドリンを引っ張り合う。膠着状態。

そこへ、助っ人が現れた。

「こんにちは」

グランペコに跨った、金色の聖騎士^{パラディン}だった。金髪の上に

月桂冠を載せ、春の日差しを受けて甲冑が輝いている。春一番の突風が吹いて、深緑色のマントがばさりと翻った。

「おや、お取り込み中でしたかね。ローグさん。教会に祈りを捧げにいらつしやったのですか？」

聖騎士は彫像のように端正な、そして表情の乏しい顔立

ちを向け、抑揚のない声で言う。

「こちらは死者の眠る場所ですので、どうかお静かに。争いごととは教会の懺悔室でいかがでしょう？」

カイは呆気に取られていたが、同じく気を逸らされたローグから楽器を奪い返す。パラディンは言葉を続ける。

「ご不満なら反省室^{アウナルーム}でも良いですよ」

「……おいおい、俺らはちよつと遊んでただけだぜ？」

ローグは慌てて言う、そそくさと墓地を出ていく。

すれ違いざま、腹いせまぎれに聖騎士のグランペコに足蹴を喰らわせたが、カキンッ、とオートガードの固い音がして、ローグは蹴った足を痛そうに抱えて飛び跳ねた。

怒ったグランペコがくちばしでローグの頭を突く。男の悲鳴が上がり、くちばしの端からむしられた赤毛の束が見えた。痛そうだ。

「……つちくせあ！」

声にならない声をあげて、ローグは去っていった。

カイは取り返したマンドリンを見た。弦が一本切れていたが本体は無事だ。安心すると共に、悲しさがこみ上げる。

パラディンが近くに寄った。グランペコの上から見下ろし、俯いたカイの上に大きな影を落とした。

「大丈夫でしたか？」

「あ、はい。有り難う御座いました」

カイは目元をぬぐう。そこかしこでパフォーマンスをしているバードなら、絡まれることなんて良くあることだ。

それでも、暴力を振るわれることにはまだ慣れない。パラディンはじつとカイを見ていた。

あまりに顔を凝視され、カイはどぎまぎした。顔が紅潮するのが分かる。

どこかで会ったことがある人なのかもしれないが、覚えはない。

金髪に金色の甲冑。歴史資料館あたりに描かれて飾られそうな外見だった。おまけに、緑色のマントに、緑色の瞳に、頭上には月桂樹の葉を編んで作られた皇帝の月桂冠。

見事に金と緑でカラーリングされている。そして、表情のない、彫像のような顔立ちをしている。一度見たら忘れない外見なのだが、やはり記憶の中にはない。

春風に乗って、男からふわりとハーブの香りがした。つい最近、嗅いだことのある香りだった。

ふっと緑色の瞳を細めると、男は言った。

「貴方の歌声、初めて聞いた」

「え？」

我に返ってカイは聞き返した。

「いつもは伴奏だけだったから」

ああ。

カイはブラウンの目を見開いた。

もしかして、この人は。

「初めまして。アーレスと申します。僕は」

「あつ、ゴスペルのおっちゃんだー!」

言いかけた言葉は、子供達の声にかき消された。ローグがいなくなつて、子供達がわらわらと寄ってくる。

「おじさんじゃなくて、お兄ちゃんって言って貰えると嬉しいな。まだ十代だからね」

アーレスは苦笑して、子供の頭に手を置く。

まだ十にも満たない子供から見ると、二十歳近くの年齢はおじさんなのかもしれない。

「そろそろ礼拝の時間だよ。ほら、行つておいで」

アーレスの言葉に、子供達はわーっと教会へ走っていく。それを微笑ましく見送りながら、カイは聞いた。

「子供、好きなんですか？」

「子供は嫌いだよ」

一瞬、聞き間違いかと思つたが、はつきりとアーレスは言つた。その表情からは何も読み取れない。

「自分が計算高くて嫌な子供だったからね。他の子供もみんなああなのかと思つてしまふんだ」

「そう……ですか」

そうとしか言えなかった。思わぬ答えに、心臓がドキドキ鳴つていた。

初対面なのに、随分と自分のことを隠さずに話す人だなと思つた。良い見方をすれば、裏表がないのか。

カイはアーレスの歌声を思い浮かべる。

カイが歌うときは、音程を確かめるように声を出す、アーレスの歌にはそれがなく、はつきりと決まった正しい音を出す。例えば周りと音がズレていても、周りがズレてるんだと錯覚しそうな程度には迷いが無い。それを聞いて、何となく、率直で自我が強い性格をイメージしていた。

勝手にこちらが合わせたとはいえ、何度もデュエットした仲だ。不思議と初めて会った気がしなかった。

「君の歌さ」

ふと、アーレスが言つた。

「はい？」

「喉が開いてない感じがする」

カイはどきりとした。

前々からバードギルドの人には注意されて気にしていたことだ。アールスも見抜いていたのだ。

「あ……他の人と比べて、なんかボクの声、内にこもってますよね。分かつてはいるんです」

アールスが右手の金色の籠手を外す。自分の顔を指さして、口を大きく開けて言う。

「あーっ、って言うてみて」

カイは立ち上がると、真似をして、大きく口を開けてあー、と言った。

「触るよ」

突然、アールスがカイの口の中に指をつっこんだ。

「……!!」

心臓が口から飛び出そうなほど驚いたが、アールスの指が二本も入っていて、されるがままにしかできない。ぐにぐにと生暖かい指が動き、口の奥へと進む。舌の置き場所に迷った挙げ句にアールスの指を舐め上げてしまい、ああ、変に思われたらどうしようと思うが混乱する。唾を飲み込む音が、相手に聞こえそうなほど大きく鳴る。

アールスは真剣な顔で、緑色の瞳でカイの口の中を見ている。容赦なく舌を指で抑え、根本を押さえつける。

「分かるかな? この舌がふさがって喉が開いてない。音程は合ってるけど声が抜けてない」

ぐいっ、と舌を押さえられ、軽い嘔吐反射が出そうになるのを我慢しつつ、カイは羞恥で真っ赤になった。

「この状態のままで歌ってみて」

かなり戸惑ったが、カイは素直に従う。

恥じらいながら発声すると、指を突っ込まれた状態ではあったけれども、腹から喉へと綺麗に抜けた音が出た。

「そう、この感じ。分かったかな」

アールスは指を引き抜く。銀色の糸がカイの唇と彼の指の間に糸を引いて垂れた。

その様子に、さらにカイは動揺し、赤面した。

「あ……、ありがとうございます」

「いえいえ」

アールスは何事もなかったかのようにハンカチで手を拭くと、聖騎士の籠手を付け直して言った。

「君の声、きれいなソプラノだね。……もしかして、切ったりしてるとか?」

「してないですよ!」

男性歌手の中には、高音の声域を保つために男性器を切除する者もいる。カイはそこまではしてないが、変声期が終わってもあまり声は変わらず、周りから声変わりはまだなの? と聞かれることもしばしばだった。

そして、それを本人は気にしている。今日はきれいなソプラノと表現されただけまだマシだ。

「そう。良かった」

カイは、君はどうなの、とアールスに視線を向ける。

「僕も切ってないよ。声、低いだろう?」

「あ、ですよ」

アールスは教会のほうを向いて、ペコの手綱を取る。

「それじゃ、僕は賛美歌の当番があるから」

サンプル H シーン

カイはガクガクする足でアーレスの部屋に辿り着く。

「お願い、これを外して……ッ」

アーレスはベッドの上で本を読んでいた。カイは本を奪い取ると、その上に馬乗りになって懇願した。

「途中で音を上げると思ったのに、よく我慢したね」

アーレスが少し冷めた目で、カイの銀髪を梳く。その手の動きにすら反応して、身震いしながらカイが言う。

「いいから、早く……外して……ッ！ お願いします！」

「で、ずっと耳打ちしてたけど、全然返事くれなかったよね。どういふプレイでイかせて欲しい？」

部屋に辿り着いて安堵すると、緊張が解けたのもあって、涙がボロボロと零れた。滴をアーレスの顔の上に垂らしながら、自分でズボンを脱ぐと、黒いベルトでガチガチに固定されたペニスを押しつける。

「あ……あ……もう、何でもいから、イかせてよおッ」

アーレスはカイの表情を満足そうに見ると、涙を指先で拭い、上体を起こしてカイの身体を抱き寄せる。カイは子供のように泣きじゃくっている。

「ごめんね。後ろ、抜いてあげるね」

カイのお尻に指先を這わせると、張り型をぐりぐりと引っ張って引き抜く。カイが小さく呻く。

ストッパーになっていた大きな粒がカイのアナルからぶりゅつ、と引きずり出され、本体がずるりと引き抜かれた。

「……ひいんっ！」

その感触に強い快感を覚え、同時にペニスが激痛を返す。

カイは悲鳴をあげ、アーレスの肩に指を突き立てて、パラディンの甲冑に傷が付くかと思うほど引っ掻く。貞操帯のベルトが縄で締め上げた塩漬^ハけ肉のように食い込んでいる。

「よく頑張ったね」

アーレスは貞操帯の鍵を取り出して開錠する。カチャリ、と軽い音を立てて束縛が解かれ、カイのペニスが開放感に包まれた。全体に痛々しい赤い跡がついたペニスをいたわるように撫でると、早く欲望を吐き出したくて、カイが自分で扱こうと手を伸ばす。

「駄目だよ。僕が抜いてあげるからね」

カイの手をそれぞれの両手で絡め取ると、ガチャリと手錠をかける。そして、自分の手にはめれた金色の手甲を脱ぐと、裸の指に白ポーションを垂らしてべとべとにする。

そのままカイのペニスにもローションを塗りつけ、指先を絡ませて撫でる。赤い跡がポーションの効能ですうっと消えていく。優しく撫で上げると、上からカイの声が降る。

「駄目、そんなんじや、満足できないよ……」

アーレスは口の端に意地悪そうな笑みを浮かべる。

「酷くして欲しいんだよね？」

カイは虚ろな目でぐくぐくと首を上下に振る。

「いいよ。それじゃ、四つん這いになって」

カイはアーレスの上から退くと、四つ足の獣のように這いつくばった。銀色のポニーテールを枕に押しつけ、肩越しにアーレスを見上げる。